

本件上告を棄却する。

検るのず陷命項い反る棄
 副ず民信に運四な違ず破
 る信国く害い第し法信を
 あとに如弊難至有憲と決
 である度ののれ乃をはの判
 事あ高斯等免項權ても原
 檢でる高訴は二訴付ないで
 副効すし濫死第起になので
 は無信照とて條は訴らる
 のし確にとつ八事公たす
 た反と條えと十檢件ば信
 し違る十與に第副本れ確
 起にであ四を人法うたけと
 提法で至權も庁思うたけと
 訴を憲神乃訴恰察と起しあ
 公法律の一條一起は檢るの棄
 付に法第十事そすさ事を違
 件分は法副檢ある首肯檢之はし
 本部と憲くで礎がはしとたぎ
 したこたな命基ろ所としたぎ
 点しるせも運のこ判効理を仰
 一與すわ迄い用と裁無受判
 第附衛負るな任るにをを裁
 意に防をす来事来故起訴御
 趣事ら務用出檢てる提公の
 告檢か義引の副つあ訴件と
 上副撃にをとる因で公本す
 利を政民例こあの第のが却
 武權の国実るで其次其所棄
 瀨訴等しるれじとるり制を
 百起訴証あ免同るずよ裁訴
 人中濫保ではとみ信に拘公
 護度ををのとり鑑と由不件
 弁制民利もこおにの理も本
 事国權るるで等ものにし

[illegible]

同第二点、被告人は犯時泥酔していたので心神喪失の状態にあつたものと信ずる。仮に原判決証拠説明中に引用してある証人Aの「其の男（被告人を指す）は物事が判らない程酔つて居なかつた」旨の供述に拠るとすれば被告人は犯時心神耗弱の状態にあつたものと信ずる故に仮に原审の本件に関する有罪認定を正当だとし、原审には本件に付ては刑法第三十九条第一項又は第二項を適用して被告人を免訴する。又は被告人に対して減刑しななければならないものと確信するに基き、第三十九条の適用を脱落したのであるから、原判決は破棄さるべきものである。以上であるけれども、

原判決は、被告人は昭和二十三年八月二十一日函館市 a 町 b 番地 B 事務室で事務員 C 所有の紺オーバーを着及びするめ、刻みするめ等在中の風呂敷包一個を窃取した事実を認定したのであつてその当時被告人が心神喪失又は心神耗弱の状態にあつたことは原判決の認定しなかつたところであるから、原判決が右事実について刑法第三十九條第一項又は第二項を適用しなかつたのは当然であつて、論旨は理由がない。

[illegible]

通束に理
う拘載の
い記その
の底に
人身右到
護で、は
弁廷ら旨
とは判か
る公論と
こがあす
る人で張
す被告主
存被妥と
にはがの
書載のもの
調記した
判のする
公右解受
回も、旨束
第二趣拘
審れいう
原けいと
がくとい
載欠ない
記をな
り確認
明認め
通やを
たやと
し辞こ
記措る
掲げに
旨あり
論で

りによ

由がない。

同第四点 原審は審判の公開に関する規定に違反して本件を審理している原審の第一第二第三回公判調書中公開か否かの部分を調べて見ると單に「公判を開廷した」旨を記載してあるに過ぎない秘密公判で審理したものであるか公開法廷で審理したものか不明であるから原審は本件につき審判の公開に関する規定に違反したものと断ぜざるを得ない仍つて原判決を破棄し相当裁判仰度し、というにあるけれども、

公判というのは公開の審判を指称し「公判を開廷した」というのは、法廷で審判を公開したことを意味することは疑ないところであるから秘密公判などという矛盾観念を想定して原裁判所が審判を公開しなかつたものと主張する論旨の理由がないことは明白である。（その他の上告論旨及び判決理由は省略する。）

よつて本件上告は理由がないので、刑事訴訟法施行法第二條、旧刑事訴訟法第四百四十六條を適用し、主文の通り判決する。

（裁判長裁判官 藤田和夫 裁判官 田利清 裁判官 佐藤昌彦）